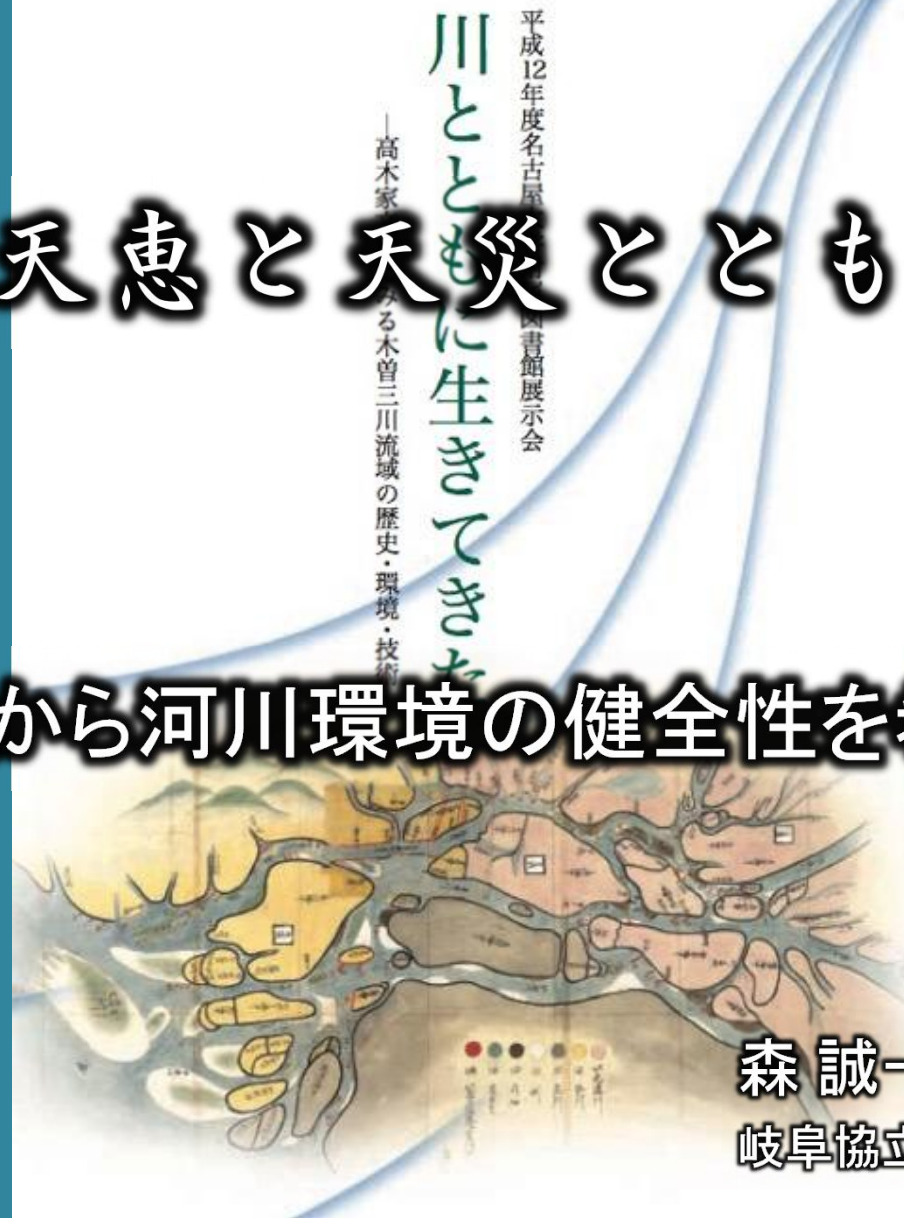


現存する河口堰と如何に付き合うか

天恵と天災とともに

魚から河川環境の健全性を希求



森 誠一

岐阜協立大学 地域創生研究所

(背景)
気候変動(洪水・高潮等)

流域治水

新しい展開①

社会思潮の変容

治水×利水

治水と利水(発電)で望ましいダム
の水位が異なる中での効果最大化 等

流域総合水管理

○治
○発
○利
○あ

治水×環境

治水と環境で整備時の配慮事項が
異なる中での効果最大化 等

水利用

流域全体、あらゆる関係者で

- ・安定的に水を供給する
- ・貴重な水資源を有効活用する
- ・国産でクリーンな電力を増やす

水の

(背景)

2050年 CN実現
気候変動(渇水)
産業構造の変換
人口減少 等

気候変動/流域治水:流域総合水管理
グリーンインフラ、ネイチャーポジティブ

ただ、このポンチ絵をどこまで実装できるか

「生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方」提言(案)における今後の河川整備のあり方

・国土交通省が事務局を務める「生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方」提言(案)における今後の河川整備のあり方 1.はじめに

新しい展開②

生息・生育・繁殖の場

- ・河川環境の整備と保全の目標、維持管理
 - ・河川整備基本方針、河川整備計画への記載内容
 - ・生物の生息・生育・繁殖の場に関する河川整備の例
 - ・河川や地域に配慮した河川整備のあり方
 - ・河川のダイバーシティの創出
- (2) 生物の生息・生育・繁殖の場を保全・再生・創出する河川管理
- ・事前防災や災害復旧における河川整備のあり方
 - ・順応的な河川整備のあり方
 - ・老朽化対策におけるネイチャーポジティブ
 - ・DXに象徴されるようなデジタル技術等の積極的な活用・生産年齢人口の減少への対応

4-2 流域における取組

(1) 流域連携・生態系ネットワーク

- (2) 民間企業を含めた流域のあらゆる関係者が積極的に参画したくなる仕組みづくり
- ・投資効果の判断等に資する河川環境の価値や取組効果の見える化の推進
 - ・金融手法を活用し柔軟な資金調達を行いやすい仕組みの構築
 - ・官民連携による持続的な維持管理、マネジメントへの支援の充実
 - ・利用者が活用しやすいデータの整備とオープン化

- ・民間企業によるネイチャーポジティブの取組を誘致するための沿川地方公共団体との連携

1977年

本曾川水系生物調査報告書

1996年

河川感潮域

長良川河口堰問題を考えるために

潮汐の影響を受ける河川下流域。どのような自然環境を有し、人間によってどう改変されてきたのか。長良川を中心とし、堰運用前後の変化も含めた感潮域研究の成果。

長良川河口堰問題は「環境保護運動の象徴」として、また「推進すべき公共事業の象徴」としてクローズアップされて、議論も過熱していった。筆者等は研究者としてまた弁護士としてその渦中にあった。われわれが目ざしたのは、長良川河口堰計画に対して冷静で客観的な検討を行い、論争を科学的な議論の場に持ち込むことであった。しかし、残念ながらそうした場は著しく制限され、筆者等の発言もマスコミでは建設反対派のコメントとしての取り扱いで済まされがちであった。もちろんこのことは、これまで長良川河口堰問題に関連して交わされた

「水資源政策の失敗」2003 あとがき

いなかったと言っているのではない。双方の議論にある科学的根拠、そこから導き出され、事実として確認可能なものを尊重して、議論の中で共通の基盤とする雰囲気に欠けていたのではないかと、言っているのである。本書では利水や治水をめぐる推進論を批判しているが、かみ合わない、あるいは論拠の希薄な建設省側の論理がこれまで繰り返されたのはまことに残念である。

公共事業とコミュニケーション研究会

水資源政策の失敗

長良川河口堰

著者
伊藤達也
在間正史
富樫幸一
宮野雄一

2003年



水資源・環境学会賞 4

当時の関係者の生の証言でつづった決定版！

成文堂

長良川中下流域で気になる環境項目：

1. 河川文化として

- ・食文化(アユ、ナマズ、ウナギ、サツキマスなど)
- ・民間信仰(鯰絵馬など)・漁労(観光やな・鵜飼など)

2. 木曽三川(汽水域)の比較

3. 悪水の強制排水と負荷(土砂・水質)

4. 堰開門の頻度と操作効果

5. 湛水化による環境変容

6. 流入域と湛水域の動態(上流河道への影響)

7. 塩害と水文学(伏流水・水ミチ)

8. 自然再生の人工ヨシ帯など(木曽下流事務所)

9. コクチバスの実態、外来生物の温床化

10. 世界農業遺産を下流に拡張

11. 生物多様性の保全に関する根拠性

☆ 交流の場の設置
☆ 科学的根拠の検討
(調査項目の検討)

1) 河口堰調査検討会での発信

①物理的環境変化と生物的環境の応答＝関係の無視

例えば、ヤマトシジミが増加というが、何故か？

②調査内容・方法の項目を含め再検討が肝要。

継続蓄積は重要だが、科学は進展する。

2) 開門調査のためだけでなく、今後の生態学的視点

①堰上流の湛水域における可逆的な現行生態系の実態。

(堰直上・直下および流入域の水文動態を含めて)

②木曽川・揖斐川との汽水域比較(河床、塩水遡上、塩害)。

③フラッシュ操作(弾力的運用)と湛水域の変動想定。

それがどのような効果をもたらすか。

それに応じた予防保全を検討する。

④生物多様性(例えばアユ)の保全を如何に捉えるか!?